

## 令和4年度第1回仙台市発達障害者支援地域協議会 議事要旨

【日時】 令和4年5月30日(月) 18:30~20:30

【場所】 仙台市障害者総合支援センター 研修室1

【出席】 野口会長, 猪股委員, 大塚委員, 小野寺委員, 上西委員, 黒澤委員, 畔柳委員, 癸生川委員, 今委員, 斎藤委員, 佐藤美穂委員, 佐藤幸男委員, 平委員, 武田委員, 谷津委員, 米倉委員, 渡部委員 (欠席: 植木田副会長, 小島委員)

### 【事務局】

#### ・健康福祉局

障害福祉部 西崎部長

障害企画課 小幡課長, 障害者支援課 清水課長

北部発達相談支援センター 蔦森所長, 奈良主幹, 久保田主幹, 企画調整係 五十嵐主幹,  
乳幼児支援係 畠山係長, 学齢児支援係 綱島係長,  
成人支援係 原田係長

南部発達相談支援センター 大石所長, 乳幼児支援係 伊藤主幹, 学齢児支援係 成見係長,  
成人支援係 後藤係長

#### ・子供未来局

子供家庭保健課 庄子課長, 唐牛課長(子育て安心担当課長),  
児童クラブ事業推進課 三井課長, 運営支援課 水谷課長

#### ・区保健福祉センター

宮城野区家庭健康課 佐野課長, 若林区障害高齢課 服部課長

#### ・教育局

高校教育課 春日川課長, 特別支援教育課 秋山課長

## 1 開会

## 2 会長挨拶

- ・野口会長より挨拶
- ・委員紹介, 新委員挨拶(佐藤幸男委員)
- ・事務局については, 机上の名簿を参照
- ・仙台市発達障害者支援地域協議会設置要綱に基づき, 会議の成立について確認。本日は, 植木田副会長, 小島委員が欠席。委員19名のうち17名が参加し, 仙台市発達障害者支援地域協議会設置要綱第5条の規定に基づき, 会議が成立していることを確認。
- ・議事録署名人として, 大塚委員が選出。

## 3 議事

### (1) 本市における発達障害児者支援の現状と課題

- ・事務局(蔦森所長): 資料1に基づき説明

野口会長	<p>コロナ禍前の状況に、相談件数等が戻ってきたというのが現状かと思う。</p> <p>ただいまの事務局からの説明について各委員からご質問があればお願いします。</p>
斎藤委員	<p>2点質問がある。1点目、資料1スライド43にある「お伝えシート」について、もう少し説明をお願いしたい。</p>
蔦森所長	<p>「お伝えシート」には、相談の中で保護者と確認をした内容を記載している。相談の中では、今のお子さんの発達段階を保護者と共有している。担当する職員によって伝えることが変わらないように、お伝えシートを使って発達段階をもとにお示ししている。</p> <p>あとは、相談の中で保護者と一緒に確認したことや、次回のご相談時期の目安を記載している。相談の中で障害名まで触れている方については、その障害の内容が載ったリーフレットをお渡しする。しかし、障害名までは触れてはいないけれども「コミュニケーションの苦手さ」「不器用さ」があるという形で共有した場合は、そのことについて記載のあるリーフレットをお渡しする。また、ご家庭での関わり方について共有した場合はそういう内容のリーフレットをお渡しする。リーフレットは様々な種類を用意しており、そのケースに一番フィットするものを選んでいく。したがって、相談後には、お伝えシートとリーフレットをお渡しすることになる。サポートファイルをお持ちの方がいらっしゃればファイルの中に入れていただき、家族、かかりつけ医、園の先生方等と共有いただく。</p>
斎藤委員	<p>私どもは児童館なので、小学校入学前後で保育園や幼稚園にお邪魔して、本児にとってより良い環境を考えるためにお話を聞きに行く。その際に、保護者によってはアーチルからもらった資料をお持ちになる方もいらっしゃると思う。そういう資料が、お伝えシートという共通のものとして一つのファイルにずっとつづられていくのであれば、成長過程を見ながら、ご家族からも具体的にお話しが聞けるものになると思った。</p>
蔦森所長	<p>これまでも就学にあたっての相談は、アーチルで相談状況をまとめた資料を作っており、その資料は保護者にお渡ししている。サポートファイルをお持ちの方については、お伝えシートではなくそちらの資料をファイルに入れていただくようになる。</p>
斎藤委員	<p>もう一つの質問。46スライド、アーチルと学校との連携強化についてももう少し詳しく伺いたい。</p>
蔦森所長	<p>学校との連携の強化については、ここ数年、重要なテーマとして取り組んでいる。コロナ禍でしばらく学校訪問ができない状況だったが、令和3年度は学校でもニーズがあり、アーチルと一緒に考えたいというご依頼があり、訪問件数が増加した。実際の訪問件数も増加しているが、学校のニーズをこちらが聞いて協働しながら取り組んでいく、そうした協働の取り組みを行った件数も内容としては増えてきている。</p>
野口会長	<p>学校との連携については、良い方向に変化してきたように思う。昔は学校の方も受け入れることにためらいがちの部分があって、こちら側も積極的に足を踏み出していないというところがあった。学校に足を運びながら、学校の状況も理解し</p>

	た上での相談や支援内容についてのアドバイスができるの良いということで、少しずつ実現されてきたと思う。年に600件を超えるというのは、始めたばかりの頃からすると大きな変化だと感じる。
蔦森所長	なお、資料1スライド46にお示ししている学校訪問の件数は、訪問の実回数ではなく、学校に訪問して対応したケース数を計上したものである。
野口会長	お伝えシートについては、今委員から補足はございますか。
今委員	小児科医会とお話を進めているところだが、発達に関する相談相手としてかかりつけ医も重要である。むしろこれからは発達障害の専門医よりは、かかりつけ医がある程度発達に関する相談に乗れるようになるとういと考えている。ただ、かかりつけ医側から、アーチルでは発達についてどういう説明をしているのか、やっていることがはっきり見えない、という指摘もあったことは事実である。アーチルでどんなことを言われたかをご家族に伺うと、中々うまく伝わってこない場合もあるので、お伝えシートを利用してアーチルでお話をした内容がかかりつけ医に伝わると、かかりつけ医としてもご家族にアドバイスしやすいし、関わりやすい。普段の診療をしている医者側としては非常にありがたい。
野口会長	かかりつけ医で相談ができる体制になっていくのが、これからは大事になっていく。今委員のクリニックに患者さんが集中すると大変なことになる。かかりつけ医で発達について相談できる体制を広げていくためにも、お伝えシートのようなものをうまく活用していくということになると思う。それによって、前回小島委員からご指摘があった、幼稚園保育園への情報共有にも対応できる。
蔦森所長	これからは、例えば幼稚園の園長先生が集まる機会などに、アーチルがお邪魔させていただき、取り組みについてご説明を差し上げることも考えている。
野口会長	このお伝えシートに関して、小野寺委員から何かございますか。
小野寺委員	先月、児童発達支援センターの連絡協議会で実際のシートも見せていただいた。当センターに7月に入園する子の保護者が、初めて持ってくることになる。書面になったものを保護者がどう受けとめるだろうかという不安はある。今までのように、曖昧なところで療育に繋がり、徐々に発達障害についてわかっていくということも大事だと思っていた。アーチルからは、すでにさまざまなタイプの保護者が理解しやすいよう、色分けするなどしてわかりやすく書類を作っていたいただいている。通園の中でも保護者に対し、それぞれの時期で伝えなければならないことをわかりやすく伝えていく必要があると、今日も市連協の中で話し合ってきた。お伝えシートについては大変期待している。
野口会長	それでは佐藤美穂委員、何かご意見ございますでしょうか。
佐藤美穂委員	保育所に入っているお子さんと保護者がアーチルに相談に行った後は、必ず保育所で面談し、保護者から相談内容を聞いている。先日相談に行った方は、アーチルから特別支援保育を受けるように言われた、とのことだった。確かに気になるお子さんで少し丁寧な支援は必要だけでも、すぐに特別支援保育が必要とはいえないと保育所としては思っていたお子さんだった。また、保護者もそのように言

	<p>われることを疑問に思っていた。でも、丁寧に何度も聞いてみると、アーチルからは、特別支援保育という制度があるけれども、実際使うかどうかは保育所の先生と相談するよう言われたということのようだった。保護者の受け取りだけだと実際どのような相談内容だったのか保育所側が把握するのが難しいところがあり、アーチルの担当の方にこちらからお電話をすることもある。お伝えシートがあればスムーズに相談内容が聞けると思う。この取り組みについて初めて知ったので、とても良いと思った。これからまた夏にアーチルでの相談が控えている方が大勢いらっしゃるの、お伝えシートを保護者の方が持ってきてくれるのはありがたいと思った。</p>
野口会長	<p>お伝えシートの見本を、次回見せていただけるとよいと思った。</p> <p>他にご質問等ございましたら、お願いしたい。お伝えシートに関してでも結構ですし、あるいは委員の皆様が日頃から困っていることや感じていらっしゃるようなこと、実践等を行っている中での課題などがあればお話いただきたい。</p>
大塚委員	<p>今、私が実践している中で困っているところにはなるが、知的障害をお持ちの自閉症のお子さんで行動化の激しいお子さんたちについて。学校にいる間は比較的学校が一生懸命対応してくれるが、卒業してしまうと支援が細々とした感じになってしまう。私たち医者が薬を微調整して何か変わるわけではなく、何より生活の場が大変になっている状況がある。結局ご家族に何とか支えてもらいながら生活しているのが現状。</p> <p>私たちはよく、「薬を増やしてくれないか」「入院させてくれないか」と言われる。もちろん短期的な入院については協力できるし、したいと思っているが、やはり生活の場について支援を厚くして欲しいというのが正直なところ。</p> <p>アーチルの皆さんもすごく頑張っている。入所施設やショートステイを一生懸命調整してくれて、何とか細々つつないでいる。現場の一人一人の頑張りで何とか持ちこたえているのが現状。これはアーチルだけの問題だけではなく、もっと大きな形で、それは総論的な連携ではなくて、支援体制や支援システムとしてしっかり作ってもらえるといいと思っている。</p>
野口会長	<p>今のご発言に対して、事務局の方から何かございますか。</p>
蔦森所長	<p>今、大塚委員からご指摘いただいたところについては、今委員からもかつて同じようなご意見を頂いていた。また、他の委員の皆様からも、具体的なケースのことを通してご意見を頂戴しているところ。</p> <p>大塚委員のおっしゃる通り、特に成人になってからは家庭での生活が落ち着かず、家族だけでは対応が難しくなる場合がある。特に知的障害が大きくて行動障害のある方への対応については、我々も関係機関の協力をもらいながら、また、スーパーバイザーから助言いただきながら対応をしている。個別ケースはもちろん、地域で安心して暮らしていける仕組みをどのように整えていくのかということとは以前から投げかけられている大きな課題と認識しており、今後も本人の生活の場や住まう場についてしっかり考えていきたい。</p>
西崎部長	<p>今、大塚委員の方からご指摘があった部分については、本市としてもまさに現在</p>

	<p>の社会的な課題として認識しているところ。8050問題も絡んでおり、ご家族の方が一生懸命お子さんを支えているところにどうアプローチしていくか。そういった部分とも密接に関わる問題だと考えている。</p> <p>社会的資源については、入所施設も含め、生活を支えていく場として、例えば行動障害のある方に対応できるようなグループホームを地域の中でどう作っていくか。あとは気軽に相談できるような相談支援事業所を増やしていくといったような、具体的な動きについて仙台市で始めているところ。まずは、そういった身近な相談について受けとめができるような部分を強化していきたいと考えている。</p>
野口会長	この点につきまして米倉委員、何かございますか。
米倉委員	<p>住まいの場を担うものとしては、本当に耳の痛いご意見。何とか住まう場を増やしたいという思いは私も持っているが、とにかく担い手がいない、これに尽きる。グループホームは随分増えてきたが、重度の方の受け入れについてはやはり止まっている、広げられないでいる。これは担い手不足の問題で、日中の生活介護事業所には辛うじて職員の確保はできる。日勤で、土日祝日を休みできる職場だとまだ辛うじて人は来るが、やはり夜勤を伴う職場になってくると人の確保が厳しくなる。</p> <p>もう、既存のサービスを維持するので精一杯で、そこから広げるというところに中々行けない。これはうちの法人だけでなく、多分どこの法人も皆さんそうだと思う。そのような状況に陥っていて、ご家族が「終わりのない子育て」とおっしゃいますが、本当にそういう状況で頑張ってもらっているのは心苦しい。でも、現状としては、頑張れる間は親御さんに頑張ってもらうことしかできない。本当にどうしたらいいのかと思う。うちの法人も生活介護事業所を持っているので、その方々のこれからの住まいの場については目の前に迫った課題。私も悩みながら、今あるものをどう使っていくかというのを苦しい中で考えている。</p>
野口会長	大変な状況ではあるけれども、ぜひ前向きに進んでいきたいところ。その突破口をどうやって作っていくかということになると思う。
大塚委員	<p>米倉委員の法人の施設には患者さんをお願いしたりして、私も見に行かせていただき、本当に現場で頑張ってもらっているように思う。</p> <p>私が思うのは、仙台市の方で全体像の把握、実態の把握をして、数字として示してもらいたいということ。私は医師で、個別事例を診ているだけなので、全体像が全く見えない。患者さんとして思い浮かぶ子たちは何人もいる。そして一人一人にたくさんエネルギーを使いながら、皆さんで支援してもらっている。では、同じようなニーズを持っている人がどのくらいいるのか。そして、もちろん将来的に生活の場が心配だと思っているご家族は大勢いらっしゃると思うが、現に今どうしていいかわからないという人たちはどのように生活しているのか。アーチルが今関わっている人だけでもいいので、数字としてどのくらいいらっしゃるのかを個人的にも知りたいし、今後具体的に市として取り組む場合、それが無いと話が始まらないと思う。私が関わった時に大変なケースが、5年ぐらいして何とか落ち着いてきてよかった、となることもあるが、また同じような人が出てく</p>

	<p>る。もう少しシステマティックに考えるために、実態調査をアーチルでやっていたら教えていただきたい。また、何をニーズとしてご家族が持っているのか。それは日中のサポートだけあればいいのか、夜間泊まる場所があった方がいいのか、一緒に住むことはもう無理なのか等、数字として示してもらえると対策も考えやすいように思う。</p>
<p>葛森所長</p>	<p>この協議会の前身である発達障害者支援センター連絡会の中で、行動障害のある方の住まう場について、平成16年ぐらいからテーマとして委員の皆様からもご意見いただいた。その頃は学齢期のお子さんで、もう家庭で見られないという方が非常に増えた。その方たちを3ヶ月ほどお預かりし、安心して家庭生活を送るために必要なことをアセスメントするという自立支援事業を、米倉委員と協働して取り組んできた。その時に、各支援学校・支援学級でハイリスクとなるお子さんの人数と実態把握を行い、継続的に状況把握する必要性を感じたところ。</p> <p>現在は、学齢・成人期の相談の中で行動障害に関する相談があった時には、アーチルで名前をリスト化して定期的に状況確認をするよう努めている。</p> <p>また、第二自閉症児者相談センターが地域の支援者向けに研修を実施したり、施設にアウトリーチをしてコンサルテーションを行っている。自立支援事業を始めたころに比べると、夜に緊急の電話がアーチルにかかってくることは無くなったが、行動障害児者支援に関する課題は今後も継続的に考えていく。</p>
<p>大塚委員</p>	<p>実態把握はすごく大事。ぜひまたやってください。</p> <p>もう一つは、米倉委員がおっしゃっていた“担い手の不足”という問題を、これはアーチルが考えることではないかもしれないが、これはどこに行ってもその話を聞く。船形の郷に行っても、中堅の職員がいない、と。児童養護施設も同じ。熱意のある人は長く勤めている。そして、新しく入ってくる人は熱意もある人もいるけれど、継続してそこで働き続けることが難しい実態がある。そこについてどうすればいいのか、手当をつけるのがいいのかなど、意見として発信していってもらえると良いと思う。</p>
<p>野口会長</p>	<p>癸生川委員、支援学校に在籍しているお子さんたちの中に、障害の重いお子さんもたくさんいらっしゃると思うが、何かご意見ございますか。</p>
<p>癸生川委員</p>	<p>行動障害のあるお子さんたちの進路について。高等部3年生を卒業する段階で、進路を選ぶ時、例えば生活介護事業所に行きたいと希望する保護者の方と生徒たちがいるが、行動障害のあるお子さんの進路が決まりにくいという現状があり、そこについては課題だと思っている。</p> <p>1回目の生活介護事業所等利用調整会議で行き先が決まらずに残ってしまうといったことがあり、これをどう改善していくかを学校としても考えているところ。</p>
<p>野口会長</p>	<p>そちらも学校だけではちょっとなかなか難しい部分。これは以前からの課題でもあり、対策を明確に考えていけないと思う。</p> <p>そのほかに、学校関係の委員の方、今課題となっていることございますか。</p> <p>渡部委員、お願いします。</p>
<p>渡部委員</p>	<p>スライド46のアーチルと学校の連携強化について。学校の現場を知るアーチルの</p>

	<p>行政教員が学校に来て下さるので、とても助かっている。アーチルは常々忙しく、私は610件という実績に驚いた。行政教員を少しずつ増員しているとはいえ、アーチルに負担がかかっているのではないかと心配になった。学校現場としては、この用件でアーチルに出動を要請していいのだろうかと思いながら、お願いをしているところである。</p>
野口会長	<p>高校ではいかがでしょうか。上西委員。</p>
上西委員	<p>今年、本校は入学者が例年より多く、その分、副申書つきの生徒も増えている。コロナ禍の影響もあり単純に比較できないが、去年と一昨年の2倍から2.5倍ぐらいの生徒がすでに教室に入れないと訴えて、カウンセリングルームや学習支援センターを活用している状況。</p> <p>その中には中学校の時に不登校で、アーチルに相談歴はないが背景に発達障害の特徴があると思われるお子さんがいる。そういう子も何回か面接をしていくと、実はアーチルに相談していたということもある。何とか高校までは本人も親も何とか頑張ってきたけれども、高校になって適応が難しくなるという事例は増えてきているように感じる。</p> <p>この協議会等で知り合った先生方とつながりを持てたことで、中学校や病院、或いは外部の施設などにこちらからお伺いし、支援について話す機会が増えてきている。顔の見えるつながりが増えたのは良い傾向と思っている。</p> <p>中学校は通級指導に通っていて、支援学校に通っていてもおかしくない子もここ2年連続で入っている。頑張っていて、それも一つ嬉しい変化。</p> <p>現場の先生方は苦勞しているが、そこも支援体制を作ってサポートしている。</p> <p>今、学習支援センターでは、診断はないが発達の偏りがありそうだと思って関わっているお子さんがいる。友達が3年間いない。今、学習支援センターではボードゲームをその子に教えている。その子が、通級で一年生にボードゲームを教え、その流れでSST（ソーシャルスキル・トレーニング）をするという取組みを始めている。大学院生も一緒にやっているのだが、その子は目上の人にも「こいつ」と言う。「この場面で「こいつ」と言うのは駄目だよ」などと教えながら本人の言動が修正される、ということが日々行われている。遊びを通じてSSTをしている。</p>
野口会長	<p>学校との連携という点から、黒澤委員、何かご意見ございますか。</p>
黒澤委員	<p>当センターは学校と連携しながら相談を進めており、特に学齢後期のお子さんたちの支援を予防的な視点から行っている。ケースの多くは、不登校、所属がない、在宅という方で、成人期に向けて生活上の支障が大きくなる恐れが非常に高い方たち。その方々は成人期から見ると、在宅期間が長くなったり、あとは精神疾患を伴って生活上の支障がかなり多くなる、いわゆる困難ケースと言われるような状態。直接支援だけでは限界があり、資料1スライド44にあるように、地域支援マネジャー事業という、地域で支援に携わる学校の先生方や施設の職員等をバックアップする事業をアーチルと連携しながら進めている。当センターは仙台市から委託されて事業を行っており、福祉サービスで受け入れが難しいケースへ</p>

	<p>の支援を届ける役割を担っている。具体的には、地域での過ごしが難しくなっている方が大人になってグループホームで受け入れを断られてしまう、あとは施設にも中々定着ができない方を一定期間受け入れてもらえるような支援体制づくりを行っている。委託事業の良さをうまく使いながら、困難な状況に対して支援体制を整えていく発想で取り組んでいきたい。</p>
野口会長	<p>では、癸生川委員、お願いいたします。</p>
癸生川委員	<p>先ほど支援者会議の話が出ていたが、本校でも支援者会議が毎日のように開かれていて、アーチルが毎日居るのが当たり前のようになっている。610件という数実績を見て改めて、数の多さを実感したところ。</p> <p>小学校一年生で入ってくる子供たちの中にはまだ相談機関に繋がっていないお子さんもいて、いかにこの支援者会議をしながら支援体制を早めに組んでいくかが非常に大事だと思っている。先ほど葛森所長の方からも「予防的に関わる」という話が出たが、早期に支援体制を組んでいくことで、問題が大きくなる前に解決できると考えている。</p>
野口会長	<p>学校との連携という意味では、谷津委員からいかがでしょうか。</p>
谷津委員	<p>一点目が、「お伝えシート」に関して、乳幼児の相談支援の中で使っていくという話だったが、必要に応じて学齢期の方にも使っていただけると良いと思った。すでに、同じようなものがすでにあればよいのだが。（→事務局より：学齢期にも同様のシートがある。）学校に対しての情報共有シートがあることは承知しているが、利用している放課後等デイサービスや相談支援事業所等の情報共有シートもあるとよいと思う。</p> <p>私に関わっている学齢期のお子さんに、アーチルから言われた内容について聞くと、「何も教えてもらえなかった」と言う方もいる。そういう時にこの“お伝えシート”があるとよいと思う。どのようなことを伝えたのかが分かる“お伝えシート”は、学齢期になってから出会うお子さんにとっても大事だと思った。</p> <p>二点目は、放課後等デイサービスについて。放課後等デイサービスは仙台市に150ヶ所近くあり、かなり数としては増えてきていると思う。利用者が減ってきている事業所もあれば、定員以上の登録者がいて、何十人待ちという事業所もある。親御さんからは、「勉強させたい」「パソコンを学ばせたい」「就労に向けて準備させたい」等のニーズが聞かれていて、そういう事業所に集まるのだと思う。</p> <p>資料2-1の中に「くらす」「はたらく」「たのしむ」と書かれているように、穏やかな成人期を迎えるために学齢期で何を大事にしていくかという視点がある。生活全体が学びの場であるということが、親御さんに伝わりづらいところがある。生活リズムを整えることや、対人関係について学ぶ機会をもち、人を信じることや相談すること、自己肯定感を高めること、身辺自立、気持ちの折り合いをつける等、そういうところを大事にしていけるとよいと思っている。</p> <p>先ほど“予防”という話があったが、放課後等デイサービスもそういう役割を担っていると思うので、仙台市全体でどこの事業所でもそういった考え方を大事にし</p>

	<p>ていけるといいと思う。そうすれば、大塚先生のおっしゃったような、成人期になってどこも受け入れてくれないようなケースは減っていくのだろうと思う。</p> <p>私は相談支援専門員もつとめている。担当ケースの中には、先ほど大塚先生からお話があったような方もいるが、コロナ禍の影響を大きく受け、ご家族が非常に疲弊している。あるお子さんの保護者は、国立のぞみの園のように「専門的な支援を受けながら行動調整をお願いできる場や、大変な人を受け入れる入所施設を仙台にも作ってほしい」とおっしゃっていた。ぜひ考えていただきたい。</p> <p>最後に、私が今とても期待しているのが、仙台市のスクールソーシャルワーカー（SSW）を増やすという動き。いわゆる潜在化しているニーズをSSWが整理をして、こちらにつないでいただくこともできる。障害のあるきょうだい、病気のあるきょうだいがヤングケアラーとなっている場合もあるので、そういう方たちにも支援の手が届くようになると良い。</p>
野口会長	<p>SSWについては、しばらく前からですけども、学校だけでは対応が難しいという状況の中で少しずつ増員されてきた。福祉の立場で関われる人が、教育の中にもいるというような形で、国の予算がついている。今は、スクールロイヤーも入っているところもあり、学校でも様々な課題に対応する形になってきている。</p>

## (2) 作業部会の概要について (中間報告)

野口会長	<p>本日は作業部会長である植木田副会長が欠席のため、事務局から作業部会の意見交換の様子や今後の方向性などについて概要を報告する。その後、作業部会に参加の皆様からのご説明や補足等をお願いしたい。</p> <p>初めに、事務局から説明をお願いします。</p>
蔦森所長	<p>資料2、資料2-1～2-4について説明。</p>
野口会長	<p>資料2-2と資料2-3にある“ささけんクラブ”は、私が教え子に言って始めたもので、いわば「たまり場」を作りたいと思って始めた。最近「居場所」と言われるが、個人的には居場所というより「たまり場」というイメージでこれまでやってきているところ。</p> <p>それでは作業部会に参加頂いている委員より、補足等あればお願いしたい。</p> <p>猪股委員は何かございますか。</p>
猪股委員	<p>作業部会に参加し、私の知らない社会資源がこんなにたくさんあるのだなと思った。成人期の発達障害のある人たちの支援というところでお話すると、私自身は知的遅れのないタイプの子の保護者で、当事者にも色々なタイプの人がいるので一概には言えないが、作業部会を通して、本人自身が気軽に抵抗なく相談に行けたり、自然に参加できるような集まりがあると、本人の心の大きな支えになると思う。自己理解も大事で、そういうことも含めて考えた時にも、繋がっている場所がある、誰かと繋がっているという安心感が、安定した穏やかな生活をするうえでとても重要だと思っている。</p>
野口会長	<p>それでは次に畔柳委員お願いいたします。</p>
畔柳委員	<p>作業部会に参加して強く感じるところとしては、本当に必要になった時にいきな</p>

	<p>り相談するのは中々難しいということ。自然な形で自分の居場所があって、その中から周りの人が気づいて声をかけてくれる、自然にサポートの輪ができていくという形がいいと思った。</p> <p>学び方というのも本当に人それぞれなので、学校に行かないと学んでいないという捉え方になって自己否定してしまい、そこから前に進めなくなってしまうお子さんが一定数いらっしゃると思う。これからは、それぞれの個性を生かしながら色んな学び方をしても大丈夫と思えるよう、学び方の選択肢を増やしていけるとよい。そうして、本人が自己肯定感を持ちながら、自分らしく居られる場所を作っていけるような選択肢が小さい時から増えていくと良いと思った。インクルーシブ教育というのも色々なところで取り上げられるようになってきているが、「学校に行くこと＝学び」という考え方だけではなく、色々な選択肢が増えていくと良いと思っている。</p> <p>また、先ほどの資料1スライド46のところでは、アーチルと学校の連携強化について拝見し、本当に心強い取り組みだと感じた。担任の先生は毎日たくさんの生徒を見ながら、色んなところで戸惑ったり困ったりする場面がたくさんあると思う。また、そういった思いを言葉にして相談したり、情報交換できたりする場が十分ないままに日々の業務に追われている方も多いと思う。その中で多職種連携、いろんな方が学校の中に入って先生とお話をして、情報交換をすることで当事者も救われるし、先生にとっても有益な情報に繋がり、適切な支援に繋がっていくと感じた。渡部委員がおっしゃっていたように、アーチルの体制的に大丈夫なのかということもあるので、スクールソーシャルワーカー等色々な役割の方達がもっと学校の中に入り、低学年から色々な関わりがなされる中で、本人が色々気づいてけるような働きかけがあるといいと思った。</p>
野口会長	齋藤委員、何か補足等ありますか。
齋藤委員	<p>作業部会に参加して今日も色々なお話を聞き、ますます悩んでしまったことがある。色々な機関が頑張っている取り組みをどうやってつないで、共有し、役割分担し、補完しながらやっていけるのか、またそれをどう実際の行動に移していくかを考えると、難しい。</p> <p>ただ、野口会長がおっしゃった「たまり場」について、同じ個性を持った方たちが集まるたまり場というのは仙台市内の色々なところがあれば良いと思った。そして、この「たまり場」という言葉は広げていけると良いと思った。</p> <p>また、もう一つこだわりたいのは、生活の場である地域の中で、親支援、きょうだい支援、そして本人への支援にどのように取り組んでいくかということ。そして地域の取り組みと併せて、市内全体での「たまり場」といった取り組みを一緒にやっていかないと、誰かが1人で苦しんでいるところから脱却できないと感じた。</p> <p>あともう一点、今は便利なシステムがあるので、アーチルが主催する研修や学校向けの研修等を、オンラインやオンデマンドなどで後から見られるように発信したら、小中高の学校の先生たち、放課後等デイサービス、児童デイサービス、児</p>

	<p>童館等，色々な現場の方達が，同じ知識を共有できると思った。各現場の現状を共有することも，コロナ禍の中で得たいろいろなツールを使ってやっていくことで切り開いていくことができると思った。</p>
野口会長	<p>ありがとうございます。では上西委員，お願いします。</p>
上西委員	<p>作業部会で特に印象に残ったのは，色々な支援が「くらす」「はたらく」の中で展開されていて，色々な場所で色々な人が支援にあたってはいるが，どうしても年代ごとにぶつ切りになりやすいということ。幼稚園・保育所から学校，次は働くところで支援して，というように，ライフステージが変わるたびに場所や担当する人が変わっていく中で，このつなぎのところが結構難しい。ただ，「たのしむ」に関しては一つの趣味を持つとずっと縦軸として機能しやすい，という話が出ていた。大人になっても楽しみ続けるし，一つの趣味の中に大人もいれば子供もいて，自分が成長すると今度は教える側に回るということが一つの縦軸になりやすいというご意見が作業部会の中で出てきていて，本当にその通りだと思った。もちろん途中で趣味が変わったりはするが，一つの縦軸になり得るとするのはその通りだと思った。「たまり場」という言葉にもあるように，一つの場に人が集まって「たのしむ」ことを軸にして，では楽しむためにどう暮らそうか，どう働こうかというのも支援の一つの視点になる。“支援”となると我々も悩みがちだが，「たのしむ」の部分の一つの軸にするようなことを考えていく視点も大事にしていけるといいと思った。</p> <p>あとは，このコロナ禍の影響で支援者同士の仕事以外の交流の場が減っていることを懸念している。支援者同士の横の繋がりや雑談の中から新しいアイデアが生まれてくるのがよくある。本校では，今年度から教職員だけが参加できる時間外カフェを月1回開催することにした。それぞれ100円を持ってきて，おいしいコーヒーを飲みながらボードゲームをしましょと声掛けして始めた。第1回が4月にあり，7名の教職員が来てくれて，校長も来てくれてケーキ代もいただいた。そういう場で，今までほとんど会話がなかった新しい若い先生も参加してくれて色々と話ができた。それ以降，職員会議や学校内でお会いした時に会話がしやすくなった。支援に関して会議で考えることも大事だが，支援者同士の横の繋がりをどう作っていくかも大事。人材育成というと，スキルややる気を上げていく方向に考えがちだが，支援者同士の繋がりをどう作っていくか，その人たちが働き続けるための環境を作るというのも，我々の一つのタスクだと思っている。</p>
野口会長	<p>とても大事なご指摘だったと思う。</p> <p>では実際はサポートに回ることが多いとも思うが，平委員，何かございますか。</p>
平委員	<p>人と場の繋がり，人と繋がれる場所は私自身すごく大切だと思っている。どうしても当事者の方は職場と家の往復だけになってしまう方が多くいらっしゃる。そこで，地域活動推進センターここねっとデイで今年度から始めたのが「クラブ活動」である。例えば，音楽演奏する人が集まる，ゲームしたい人が集まる，という形。それは資料2に書いてあるような，“自分以外の人がいる中で安心して過ごせる場”で，“一人でその場で楽しむ”こともできるし，その次のステップの，“人と</p>

	<p>一緒に協力して楽しむ”こともできる。みんなでそれぞれの形で楽しいことをする集まりとして実施していて、毎回大盛況であり、そういう場が必要だと改めて感じている。</p> <p>ただ、支援の視点でいうと、その場だけにとどまってしまうのもどうかと思っている。なぜなら、その場に慣れすぎてしまうと当事者同士以外の人と関われなくなってしまうように思うからである。こういった、人と場との繋がりを保てる場が最終的に目指すところというのは、そこで人との安心感を育て、色んな人と安心して関わるためのきっかけになるような場、先ほど「たまり場」という言葉が出てきたが、そういうイメージを大事にしていけるといいと思った。</p>
野口会長	<p>みんなが好きなことで集まるような場を作ってくということだと思う。私は、ささけんクラブとは別に、鉄道研究部会も十年弱ぐらい取り組んでいる。今はコロナ禍となりお休みしているが、鉄道好きの子たちが小学生の頃から続けていて、参加メンバーは大学生や社会人になっている。やっていると色んなことがあり、トラブルもいっぱいあるが、そういった中でみんなそれなりに成長していった。みんなで好きなことをするとみな一生懸命なるし、好きなことをするためにルールを守るといのが何故か普通にできる。普段はルールを守らないのだが。そういう面白いこともあるので、ぜひそういう場が色んな所に、色んな形でできると良いと思う。鉄道好きな子もいれば、バス好きな子もいて、飛行機好きな子もいる。あるいはもっと他の、音楽など色んな好きなことがあると思うので、そういう場がたくさんあるといいと個人的には思う。</p> <p>では就労について、今回初めていらっしやいました佐藤幸男委員、現時点での課題等ありますでしょうか。</p>
佐藤幸男委員	<p>最初に質問だが、資料1スライド37、成人継続相談件数の年齢別のグラフについて。左側から、18歳と22歳のピーク、ここは高校・大学を卒業して就職するタイミングで増えているとわかるが、そのあとの28~29歳で100件ぐらい増えているが、これはどういった人たちのピークなのか教えていただきたい。</p> <p>宮城障害者職業センターでは、障害者の方が来れば、様々なツールを使って支援を行うことができるが、本人に障害についての自覚がある方、あるいは周りの方から障害があると伝えられていることが前提となる。特に、目に見えない障害をお持ちである発達障害の方々に、あなたは発達障害ですとすることはできない。ハローワークで勤務していた時にも、一般の相談をしている中でこの方は発達障害なのかもしれないと思っても、本人が障害についてお話ししていないのに、障害の専門部門を紹介することはできない。つまり私達は、障害について自覚のある方を支援するツールはあるが、逆に障害を認知していない方に支援が届けることは難しく、それが歯がゆいところでもある。</p> <p>個人的な話になるが、電車通勤で空席がある時に優先席に座ったことがあった。その際、お年寄りの方や妊婦マークを付けた方が来たので席をお譲りしようとしたが、お断りされたということがあった。これは例えだが、ツールがあっても、それを受けると受けないかはその方たちの希望によるので、断られてしまうと公</p>

	<p>共機関としてはできることが限られてくる。これが目に見えない障害という時に、こちらがどこまでできるだろうかと躊躇するところがある。</p> <p>先ほど、保護者の支援についてのお話があったが、保護者がわが子に発達障害があるとわかっている場合、本人に障害について節目のタイミング等で伝えていただければ、進路選択や就職活動の場面で支援に繋がっていく可能性が高まると思う。ご本人に発達障害の認識がある場合は、支援やサービスを受けるうえでたくさんのメリットがある。しかし、障害を告知するのは、ご本人の状態や主治医や保護者の意向にゆだねられている。本人への障害告知についても保護者を中心として取り組めるような支援が必要かと思う。こちらでも色々なツールや支援策などを提供できるように頑張っているが、中々発達障害の方がつながらないということになる。</p>
葛森所長	<p>ご質問（28歳年代の継続相談ピークの要因）についてお答えする。推定にはなるが、19歳は高校卒業したタイミング、23歳は大学卒業後というピークであるが、28歳については、昨年度継続的に高頻度で我々が関わった方たちが偶然、複数名この年齢だったため突出した件数になったと思われる。</p>
野口会長	<p>成人期にかかわらず法的なことについて、近年の動向など、武田委員何かございますか。</p>
武田委員	<p>先ほどから居場所という話があるが、中高校生や18歳19歳ぐらいになると、自分の居場所を求めて居心地のいいところに流れていき、仲間の中に自分の居場所を求める部分があると思う。先ほど、SNSの危険性について指摘があったが、SNSが原因でトラブルに巻き込まれてこちらに助けを求めてくるという事案もある。令和4年4月から民法の成年年齢が18歳に引き下げられたことに伴い、消費者トラブルの問題が18歳に下がった。その点については弁護士会でも消費者トラブルに関連する講義なども行っているが、やはり未成年者取消権が使えなくなったということで保護者の心配事も増えると思う。友人たちとの交流や地域での居場所に限らず、居場所を求めてインターネットで知らない人と繋がってしまって被害に遭うと、周りが知らない間に話が進んでしまって被害も大きくなっていくところがある。そのため、先生方や支援者だけでは防げなかったり被害回復できなかったりすることも時にはあると思う。そういった時には支援者が間に入って弁護士に繋いでいただければ、適切なアドバイスや解決手段をご提案することもできる。そういった繋がりについても頭の片隅に置いて頂けるといいと思った。</p>
野口会長	<p>大変心強いご提案でした。ありがとうございました。</p>

### (3) 意見交換

野口会長	<p>すでに内容的には意見交換に入っているが、今までの話の中でご意見等ある委員がいらっしゃいましたらご意見いただければと思います。</p> <p>大塚委員お願いいたします。</p>
大塚委員	<p>法的な話でいうと、確かに発達障害者は被害者になりやすいのでサポートが必要だと感じる。しかし、診察をしていると逆に加害者になっているケースも結構あ</p>

	り、対応が難しいと感じている。色々な罪を犯してしまい司法のご厄介になっている患者もいるが、どうしていったらいいのか、何かいい方法はないかと思う。
平委員	SNS でのトラブルについては、個人情報をごくまで出して大丈夫なのか、何をしたら NG なのか、発達障害の特性上理解しにくいところがある。私自身もそういう経験をしたことがあり、私の周りにもそういう方が多いので、やはり小学生の頃から SNS 等のネットリテラシーの教育が予防のために重要だと思う。
野口会長	ありがとうございます。今委員お願いいたします。
今委員	<p>発達障害を持つ方たちは他の人と相談するということがあまり得意ではないので、幼少期から相談する技術を身につけるための教育をする必要があると思う。以前アーチルで、信州大学精神科の本田秀夫医師の講演会があった。その中で、自閉スペクトラム症 (ASD) の方が穏やかに社会生活を送っていくための要件として、一つは自分の力を公平に知ること、そして、二つ目に相談する技術を持つということ。そうすると生活しやすくなるということをおっしゃっていて、私も実際にそう思っている。ASD の方に限った話ではないが、どういう対処をすればよいのか覚えながら生活していくことが必要となってくるので、相談するというのはこんなに良いことなのだと幼少期から経験していかないといけない。しかし、そういうことを診察室で口酸っぱくして伝えても、本人が学校で先生に相談したら「自分で考えなさい」と言われてしまった、自分で考えてやってみたら「なんてことを考えているのか」と言われてしまった、と、そういう経験を積んでしまうことがある。相談するということがこんなに良いことなのだという体験を幼少期・学齢期からさせたいと思っている。</p> <p>ただ、大塚委員がおっしゃったように、法に触れるような状況に陥ったケースについては、小児科の診察室の中だけでは支えることができない。そうすると、少年鑑別所の相談で矯正教育という形で専門的な支援を受けないといけない。今は、毎月 1 人ずつ少年鑑別所をお願いしなければならないような現状にある。本人が穏やかに生活できるようになるためには、幼少期から相談してよかったという経験を積み重ねていくことが大切で、その結果が成人期に繋がっていくということを強調しておきたい。</p>
野口会長	ありがとうございます。他に皆様から何かございますか。 渡部委員お願いします。
渡部委員	今委員からご指摘をいただいたように、学校で人に相談してよかったという経験が積めるとよいということは、まさに私もその通りだと思っている。前回の協議会でも申し上げたが、教員は生徒から相談されて一緒に解決していくという時、つい指導してしまう傾向がある。それが子供たちにとっては、“大人に相談して叱られた”と焼きつけられてしまうことになる。本人と一緒に考えることで何かしら良い結果を出そうとするだけでなく、大人と一緒に考えてくれたという“良い感覚を残す”ということが我々教員の務めだと思っている。そのことが、ここ十数年でだいぶ教員の間浸透してきたように感じており、ここにお集まりの皆様や関係機関に育てていただいたと感謝している。そして、今後も継続して取組

	<p>みたいと思っている。</p> <p>先ほど話題の中で、SNS やオンラインゲームでのトラブルというお話があったが、学校現場ではその対応にたくさんの時間を取られている現状にある。これは、発達障害の特性の有無に係わらず非常に多くのトラブルが起こっており、学校で把握することができない時間帯・場所で起こっているが、その対応を学校がせざるを得ない。そこに膨大な時間とエネルギーを使っている。その中に、発達障害の特性を持った子が絡んでいることもある。</p> <p>トラブルについては、教員と子供たちとで一つ一つ整理していくが、それでも整理しきれないようなオンライン上や学校でのやりとりがある。しかも、やりとりは言葉で発せられるものばかりでなく、陰で言われた、あるいは言われたように感じたということも含め、複雑に絡まりあっている。それを教員が一つ一つほどこいていくというようなことをしており、今、そこにかなりのエネルギーを使っている。これをずっと学校でやり続けるのか、ますます教員が忙しくなってきた本来やるべきことができていない、じっくり子供たちの話を聞いてあげなければいけないがその時間が無くなっていくという現状にある。</p>
野口会長	猪股委員、お願いします。
猪股委員	<p>触法のお話が出て、思ったところについてお話ししたい。</p> <p>皆にあてはまるわけではないと思うが、発達障害の特徴の一つとして、例えば幼稚園・保育所の頃から、人との関係性の中で自分が相手に悪いことをしたと認識しにくいということがあると思う。</p> <p>うちの子は、小学校時代にクラスメートに優しく声をかけてもらった時に、なぜかわからないが、それを“責められた”と受け取ってしまい、そのクラスメートに対してとても怒ったということがあった。それを先生が見つけてくれて、相手のお子さんの気持ちを丁寧に説明してくれた。そうしてようやく「本人もわかってくれました」と先生がおっしゃっていた。なぜかわからないけれど、その相手の気持ちを誤解してしまい、怒ったり、相手を傷つけたりということもある。だから、被害者にもなり得るし、加害者にもなり得ると思う。何かトラブルが起こった時には、どんな風に相手とのやりとりが進んでいったかをわかりやすくなぞってくださる先生方や周りの大人がいたら、とても助かると思う。それが、幼少期からの積み重ねで、必ず成人期に反映されていくと思う。</p>
野口会長	<p>ありがとうございます。教員の増員をはかっていく必要がありますね。</p> <p>では黒澤委員、お願いします。</p>
黒澤委員	<p>作業部会では、すでに対応が難しくなっている方についても触れていただきたいと思った。これまで、あくまで予防的な視点から成人期の自立を実現するために必要なことについて検討していると思うが、法的なトラブルも含め、すでに支援の必要性が高い方のイメージを少し入れていただくといいと思った。</p>
野口会長	ありがとうございます。それでは谷津委員お願いいたします。
谷津委員	<p>作業部会でも話題に出てきているように、成人期の余暇支援は非常に希薄で制度上も無いのが現状である。学齢期に放課後等デイサービスで仲間と過ごす余暇、</p>

	<p>自分で過ごす余暇, 楽しみを過ごす力を培っていても, 高校を卒業したら仲間と一緒に過ごす余暇の機会がなくなるということが多いため, ぜひ制度化について検討していただけるといいと思う。成人期になっても, 支援がある中で安心して余暇を楽しむ機会は絶対的に必要だと思う。またそれと併せて, 一般のサークルにも発達障害のある方が気軽に参加できるような, 社会に包摂される雰囲気を広げていくことも必要である。</p>
野口会長	<p>学校という場を離れても一緒に過ごしていく, 時を過ごす仲間がいるということはとても大事なことだと思う。社会に出てから友達を作るのはなかなか難しい。学生時代の人間関係をいかに将来につなげていくかという視点は非常に重要である。ささけんクラブは, 学校での人間関係を将来に続くような関係にできないかという思いで始めたところが一番大きなところである。遊んでばかりいるように見えるが, そういうことを意図している。</p>

#### 4 その他 (連絡事項等)

- ・ 委員から補足や情報提供等→無し
- ・ 傍聴者より：国立障害者リハビリテーションセンター発達障害支援推進官 泉氏より, 同センターの発達障害ナビポータルのリニューアルについて情報提供。
- ・ 事務局より：本日の議事に関し, 追加のご意見等がある場合は, 6月6日月曜日までに事務局あてにメール, FAX等で送付願いたい。また, 議事録は, 事務局にて案を作成の上, 委員の皆様の方に送付させていただく。加除修正いただき, 議事録として決定させていただく。
- ・ 次回の開催は, 年度末を予定しているが詳細は未定である。日程が決まり次第, 事務局からご連絡差し上げる。

令和 4 年 7 月 5 日

署名委員 大塚 達也